

## 「二つのたとえ」

マルコの福音書 4:21～25

### 前回の続き

今日の箇所について述べる前に、前回の「種蒔きのたとえ」についての補足を少しさせていただきます。前回このたとえについて、これは神のご計画の全体を指し示したものであると述べ、以下の節にあります「**良い地**」とはその完成である「御国、神の国」が表されていることを述べました。

#### 【新改訳 2017】マルコの福音書

4:20 **良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことです。」**

ここで「**三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ**」という表現が記されていますが、「三十、六十、百」というこれらの数が指し示す意味についても述べておきたいと思います。

#### ①三十倍

この「**三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ**」という表現に指し示された内容について考えてみたいと思いますが、まずは「**三十倍**」について。ヘブル語で「**三十**」を意味するシェローシム(**רִשְׁלֹשִׁים**)、この言葉は「**百三十**」や「**九百三十**」などのように、他の数と結びついて用いられることが多いのですが、「**三十**」という単体としては創世記 6:15 で最初に使われています。

#### 【新改訳 2017】創世記

6:14 **あなたは自分のために、ゴフェルの木で箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外にタールを塗りなさい。**

6:15 **それを次のようにして造りなさい。箱舟の長さは三百キュビト。幅は五十キュビト。高さは**三十**キュビト。**

これはノアの箱舟についての一文ですが、箱舟の「**高さ**」を示す数として使われたのが単体としては聖書で最初のシェローシムです。地上の全てを水没させた大洪水は、地上のどんな高い山よりも高い位置にこのノアの箱舟を押し上げました。ですからシェローシムが指し示す「**三十**」には、地上で最も高いという意味、またその存在が指し示されていると考えられます。それはすなわち「いと高き神の子」と呼ばれる（マルコ 5:7）イエシュアを指し示していると考えられます。ちなみにヤコブの子ヨセフがエジプトのファラオの夢を解き明かし、後に起こる出来事を預言したのがヨセフが「**三十歳**」の時でした（創世記 41:46）。またイスラエルの王ダビデは「**三十歳**」で王となり（IIサムエル 5:4）、イスラエルの祭司たちは「**三十歳**」からその職務が認められました（民数記 4:3）。ですから「**三十**」には

「預言者、王、祭司」の存在が指し示されており、それはつまりこの三つの働きを兼ね備えた存在であるメシア、すなわちイエシュアが指し示されていると考えられます。そしてイエシュアが神の国を宣べ伝え始められたのは「三十歳」(ルカ 3:23) でした。このように「三十倍」というたとえ、表現には神の御子メシアであるイエシュアが指し示されていると考えられます。

## ②六十倍

次に「六十倍」という表現について。ヘブル語で「六十」をシッシーム(𐤑𐤍𐤔𐤍)と言いますが、これも単体で見ると、最初の言及は創世記 25:26 になります。

### 【新改訳 2017】創世記

25:26 その後で弟が出て来たが、その手はエサウのかかとをつかんでいた。それで、その子はヤコブと名づけられた。イサクは、彼らを生んだとき、六十歳であった。

「ヤコブ」すなわちイスラエルが生まれた時、その父「イサク」はシッシーム「六十歳」であったことが記されています。ですから「六十倍」という表現にはイスラエルの民の存在が指し示されていると考えられます。ちなみに雅歌 3:7 にこのような歌があります。

### 【新改訳 2017】雅歌

3:6 煙の柱のように荒野から上って来るのは何だろう。没薬や乳香、隊商のあらゆる香料の粉末をくゆらせて来るのは。

3:7 見よ、あれはソロモンの乗る輿。周りには、イスラエルの勇士の六十人衆がいる。

これは「ソロモン」すなわちイスラエルの王が輿こしに乗って来られる様子を歌ったものですが、その王は「イスラエルの勇士の六十人」とともにいることが記されており、もちろんここにもシッシームが使われています。このように「六十倍」という表現にはイエシュアを王とし、これに付き従う「イスラエル」の民が指し示されていると考えられます。

## ③百倍

最後に「百倍の実を結ぶ」という表現について。「百」を意味するヘブル語メーアー(𐤌𐤍𐤁𐤀)、この単体としての最初の言及は創世記 11:10 です。

### 【新改訳 2017】創世記

11:10 これはセムの歴史である。セムは百歳のとき、アルパクシャデを生んだ。それは大洪水の二年後のことであった。

11:12 アルパクシャデは三十五年生きて、シェラフを生んだ。

11:14 シェラフは三十年生きて、エベルを生んだ。

これはノアの長子「セム」についての記述です。彼も父ノアとともに箱舟に乗り、「大洪水」による滅びを免れました。その彼が大洪水後の新しい地上において「アルパクシャデ」を生んだのがメーアー「**百歳**」の時であったことが記されています。この「アルパクシャデ」の子孫「エベル」はイスラエル人の別称である「ヘブル人」の由来となり、彼の家系からアブラム、すなわちイスラエルの父祖アブラハムが生まれ（創世記 11:26）、さらにこのアブラハムは自身が「**百歳**」の時に約束の子イサクが生まれます（創世記 21:5）。ですからこの「**百**」メーアーにはイスラエルの民の繁栄と祝福が指し示されていると考えられます。実際にこのようにも記されています。

【新改訳 2017】創世記

26:12 イサクはその地に種を蒔き、その年に**百倍の収穫**を見た。【主】は彼を祝福された。

【新改訳 2017】Ⅱサムエル記

24:3 ヨアブは王（ダビデ）に言った。「あなたの神、【主】が、この民（イスラエル）を**百倍にも増やして下さいますように**。わが主、王の目が、親しくこれをご覧になりますように。

このように「**百倍の実を結ぶ**」という表現には、神のイスラエルの民に対する祝福および約束の成就が指し示されていると考えられます。つまり「**三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ**」という表現には、**王の王であるイエシュアと、この御方の民としてのイスラエル、これらの存在によって地上に神の祝福がもたらされる**という神のご計画の完成が表されていると考えられます。

## 1. <sup>しよくだい</sup>燭台の明かり

それでは今日の本題に入りましょう。今日は二つの短いたとえについて考えます。まず一つ目は「**燭台の明かり**」を用いたたとえです。

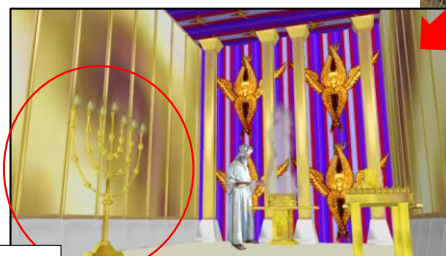
【新改訳 2017】マルコの福音書

4:21 イエスはまた彼らに言われた。「明かりを持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。」

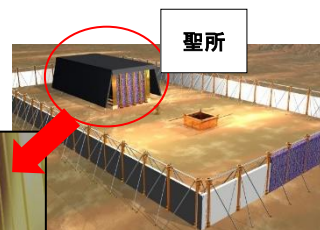
イエシュアは「**燭台の上に置くため**」に「**明かりを持って来る**」と言っておられます。ここで挙げられている「**燭台**」とはメノーラー(מְנוֹרָה)と言い、本来はモーセによって建てられた幕屋の聖所の内部を照らすための道具として作られたものです。



燭台(メノーラー)



聖所の内部



聖所

モーセの幕屋

この聖所には窓がありません。出入口も垂れ幕でしっかりと覆われています。ですから「燭台」に明かりがつかないければ中は真っ暗で、この聖所の中に入る祭司たちが務めを果たすためには「燭台」の明かりが必要不可欠となります。そしてそれは同時に、聖所の外からは内部の様子が隠されており、全く見えないということでもあります。この事実を踏まえたとえ、イエシュアはこのたとえの説明として次のように述べておられると考えられます。

【新改訳 2017】マルコの福音書

4:22 隠れているもので、あらわにされないものはなく、秘められたもので、明らかにされないものはありません。

4:23 聞く耳があるなら、聞きなさい。」

ここで「隠れている『もの』」また「秘められた『もの』」という箇所にはヘブル語では「言葉」を意味するダーヴァール(דָּבָר)が使われており、「隠れている言葉」「秘められた言葉」という意味にも捉えることができ、神の御言葉には秘められた意味、奥義があるということが指し示されていると考えられます。しかしその奥義は聖所の中のメノーラー「燭台」の明かりのように、聖所の中に入る者として選ばれた者には照らされ、明らかにされますが、外にいる者には隠されたままであるというたとえを通して、神の御言葉に秘められた意味、奥義は、誰にでも理解できるものではなく、祭司たちのように、神がお選びになった者だけに明らかにされるということであり、それが「聞く耳があるなら、聞きなさい。」というイエシュアの御言葉の意味であると考えられます。

## 2. あらわにされる

また「隠れているもの」という箇所に使われている「ふさぐ、秘める」という意味のサータム(סָתַם)という動詞は本来、アブラハムが掘った井戸が、彼の敵によって土で埋められ「ふさがれた」出来事(創世記 26:15)を指し示した言葉で、今日も続くイスラエル、ユダヤ人に対する迫害の歴史にも結び付くものであると考えられます。

そして「あらわにされないものはなく」という箇所に使われているガーラー(גָּלָה)という動詞は本来、大洪水の滅びを免れた、救い出されたノアの様子を表した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

9:20 さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作り始めた。

9:21 彼はぶどう酒を飲んで酔い、自分の天幕の中で裸になった。

ノアは「自分の天幕の中で裸になった。」とあり、ここに聖書で最初のガーラーがあります。後にノアはぶどう園の農夫となりました。ぶどうは育てるのに非常に手間のかかる農作物で、また温暖で外敵の少ない環境を必要としていました。ですからノアのぶどう園は、ノアのように忠実でよく働く者が、裸で寝ていても問題ないほどに豊かで、安全であった状態が表されていると考えられます。このようにガーラーとは本来、滅びを免れ、救われた者が平和で安心して住まう状態が指し示されていると考えられ、

ここに「神の国」が表されていると考えられます。ですから「隠れているもので、あらわにされないものはなく」という御言葉には、**迫害や敵の攻撃に苦しむアブラハムの子孫であるイスラエルの民が、滅びを免れ、「神の国」という永遠の平和と安息の中に住まうようになる**という神のご計画が表されていると考えられます。これがすなわち「**秘められた**」神のご計画であり、「**聞く耳がある**」神がお選びになった者にのみ「**明らかに**」なる、成就、実現する神のご計画であると考えられます。

### 3. 聞く耳

ところでイエシュアが言われた「**聞く耳があるなら、聞きなさい**」の「**聞く耳**」とは一体どんな耳で何を指し示しているのでしょうか。ここで使われているのはヘブル語で「耳」を意味するオーゼン(אָזְן)という名詞ですが、その最初の言及は創世記 20:8 です。

【新改訳 2017】創世記

20:7 今、あの人の妻をあの人に返しなさい。あの人は預言者で、あなたのために祈ってくれるだろう。そして、いのちを得なさい。しかし、返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことを承知していなさい。」

20:8 翌朝早く、アビメレクは彼のしもべをみな呼び寄せ、これらのことをすべて語り聞かせたので、人々は非常に恐れた。

これはアブラハムの妻サラをゲラルの王アビメレクが奪ったという出来事の一節です。事の発端はサラが非常に美しく、またアブラハムが彼女を妻ではなく妹だと言ったために起こった出来事でしたが、アビメレクの夢の中で神が真実を明かされ、サラをアブラハムに返すよう彼に命じられたのでした。「**しかし、返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことを承知していなさい。**」という神の御言葉を「**聞かせた**」(直訳では**耳**の中に入れた)と訳されている箇所に聖書で最初のオーゼンがあります。これを「耳」にした「**人々は非常に恐れた**」とあります。ですからオーゼンとは本来、**神に聞き従わない者は滅ぼされるという事実を聞いて、これを恐れること**を指し示していると考えられます。つまり「**聞く耳があるなら、聞きなさい。**」とは、**神に対する恐れをもって聞きなさい**という意味でもあると考えられます。この神を恐れる心は、人にとって非常に重要です。なぜなら人は恐れのないものすなわち自分よりも弱い、劣ると見えるものには絶対に聞き従わないからです。ですから人は神に聞き従うためには神を恐れる必要があるのです。しかし重要なのはあくまで恐れることではなく、聞くことにあります。この神の御言葉を聞くということの重要性を踏まえ、更に強調したものが次に語られる「**秤**」を用いたイエシュアのたとえです。

### 4. 秤で量る

【新改訳 2017】マルコの福音書

4:24 また彼らに言われた。「**聞いていることに注意しなさい。あなたがたは、自分が量るその秤で自分にも量り与えられ、その上に増し加えられます。**」

4:25 持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまで取り上げられてしまうからです。」

「聞いていることに注意しなさい」という言葉から始まるこのたとえは、御言葉を聞くことが「秤」で「量る」ことにたとえられていると考えられます。この「秤」のことをヘブル語でミッター(מִטָּה)と言い、「量る、計る」という意味の動詞マーダ(מָדָה)がその語源です。この最初の言及は出エジプト記 16:18 です。

【新改訳 2017】 出エジプト記

16:15 イスラエルの子らはこれを見て、「これは何だろう」と言い合った。それが何なのかを知らなかったからであった。モーセは彼らに言った。「これは【主】があなたがたに食物として下さったパンだ。



16:16 【主】が命じられたことはこうだ。『自分の食べる分

に応じて、一人当たり一オメルずつ、それを集めよ。自分の天幕にいる人数に応じて、それを取れ。』

16:17 そこで、イスラエルの子らはそのとおりにした。ある者はたくさん、ある者は少しだけ集めた。

16:18 彼らが、何オメルあるかそれを量ってみると、たくさん集めた人にも余ることはなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった。自分が食べる分に応じて集めたのである。

これは「マナ」とも呼ばれる、モーセに導かれて荒野を旅したイスラエルの民に「主があなたがたに食物として下さったパン」についての記述です。神はこれの集め方や集める量について命じられ、民は「そのとおりにした」とあります。そして「それを量ってみると」という箇所にも聖書で最初のマーダがあり、その量が「自分が食べる分に応じて」たものであったとあります。この出来事は、イエシュアがたとえを用いて御言葉を宣べ伝えられた様子とよく結びついています。なぜならこう記されているからです。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

4:33 イエスは、このような多くのたとえをもって、彼らの聞く力に応じてみことばを話された。

4:34 たとえを使わずに話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちには、彼らだけがいるときに、すべてのことを解き明かされた。

このように、イエシュアはたとえ話という「秤」を使い、人々の「聞く力」をまさにマーダ、量られたのです。しかしイエシュアの、神の「秤」にはどうやら目盛りが二つしかないようです。それは「たくさん」と「少しだけ」です。実際にイエシュアは「聞く力に応じて」とはあっても、たとえの「すべてのことを解き明かされ」る者と、そうでない者という二つの対応しかしておられません。これは神が人に対して二つの選択肢しか持っておられないことを表していると考えられ、それはすなわち「救い」か「滅び」かということです。イエシュアのたとえには「神の国」についてのご計画が表されていると

述べました。ですから「すべてのことを解き明かされ」るとは、それを聞く者に救いが「神の国」が現実となって訪れる、そして招き入れられるということです。逆に御言葉がたとえのまま、隠されたまま、すなわち御言葉を聞かない者からは全てが奪い取られます。それが「滅び」であり、「神の国」がこの地に来るその時、まさに「持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまで取り上げられてしまうからです。」という御言葉が現実のものとなるのです。ですからこの「持っている人」とはイエシュアのたとえ、御言葉の持つ意味を解き明かされた者というだけではなく、「神の国」の民として神がお選びになった人のことだと考えられます。

## 5. 持っている人、持っていない人

この「持っている人」には「その上に増し加えられ」、「さらに与えられ」ることが約束されています。ここに「加える、増加する」という意味のヤーサフ(אסף)と、「与える、置く」という意味のナータン(נתן)がそれぞれ使われており、これらの最初の言及を見てもとヤーサフは創世記 4:2 で、アダムとエバの子アベルが生まれ、彼が「羊を飼う者」となったことを指し示し、またナータンは創世記 1:17 で神が天地創造の第四日に「地上を照らすもの」として太陽と月を置かれたことを指しています。これらの本来の意味を持って捉えるならば「持っている人」すなわち「神の国」の民には、地上を統治し、またそこに生きる全てのものを養い育て、守り導くという役割、働き、権威が与えられる、委ねられるということが指し示されていると考えられます。

そして一方、これと真逆の立場となるのが「持っていない人」です。この人は「持っているものまで取り上げられてしまうからです」とありますが、一体何が取り上げられてしまうのでしょうか。ここには「取る」という意味のラーカハ(לקח)が使われており、その最初の言及は創世記 2:15 で、ラーカハは本来、神がエデンの園を創られ、そこに住まい、管理する者としてアダムを連れて来られたことを指し示した言葉であると考えられ、先の「持っている人」に与えられる権威と同じものであることがわかります。しかしそれが「取り上げられてしまう」のです。ですから「持っていない人は、持っているものまで取り上げられてしまうからです」という御言葉は、永遠の滅びを意味するものであると考えられます。

人が教えることわざやたとえ話は、今というこの世を生きる者への教訓ですが、イエシュアが宣べ伝えられたそれは、この世の終わりを指し示し、そして次に来る永遠の世を表したものです。しかしただ読み、ただ聞いただけではそれは理解できず、必ず解き明かされなければならないのです。そしてそれが解き明かされる者、解き明かしたを聞く者、受け取る者には必ず「神の国」が現実となって与えられます。ですからこれからますます聖書が解き明かされることを求めましょう。どうか御父が聖霊によってそれをしてくださいますように。